外山義　－軌跡と建築－
Professor Tadashi Toyama - His Life and Works -

三浦　研
Ken　Miura

はじめに

早いもので外山義先生がお亡くなりになられてから5ヶ月が過ぎた。あまりにも急な死。感傷に浸る間もなく、京都での密葬、東京での告別式、研究等の事務手続き、調査継続の準備、卒業論文の指導、作成中の原稿の仕上げ、追悼集作成のための打ち合わせが続き、気が付いたら春を迎えていた。未だ一段落とはいえないが、助手として研究、調査、建築設計など、5年間仕事を共にさせていただいた立場から、先生がなされてきたこと、また目指したところを今一度振り返りたくtraverseに紙面をお借りする次第である。

生い立ち

誰しも生い立ちは少なからずその後の人生に影響するものであろう。外山義先生の場合は、牧師の家庭に生まれたことがその後の生き方を規定する。

先生は終戦後の1950年岡山市の焼け野原に建つバラックの教会に日本キリスト教団蕃山町教会牧師外山五郎の長男として生まれ、その後、5歳で牧師である父の転勤に伴い、房総の日本キリスト教団九十九里教会に移り、東北大学への入学までをそこで過ごす。牧師である父親は、画家を目指しフランスに留学した経験もあり、貧しくも生き方に対する厳しさと美しいものへの鋭い感性の持ち主。ただし当時の房総は貧しく、簡素なつくりの教会の一角にある住まいは家族で一部屋しかないのに、家には宗教だけでなく美術や哲学に関する本で溢れていた。

しかし、九十九里の生活について先生自身はあまり多くを語らなかった。思うに当時の外山家が房総における一般家庭からかけ離れており、クリスチャンであること、またクリスチャンとして守るべき厳格な規範が、先生をして周囲から浮いた存在にさせていたのであろう。昼休み小学校に忘れ物を届けた母親が、食事前のお祈りを長時間する先生にずいぶん待たされたというエピソード。そして先生の50歳を祝うパーティーを研究室で主催した際、この時期自らを撮影したポートレイトから逃げるように顔を背けたことから、幼少期は房総という土地柄と自分を取り囲む西洋的な哲学・宗教・世界観の狭間で孤独で内向的だったと考える。

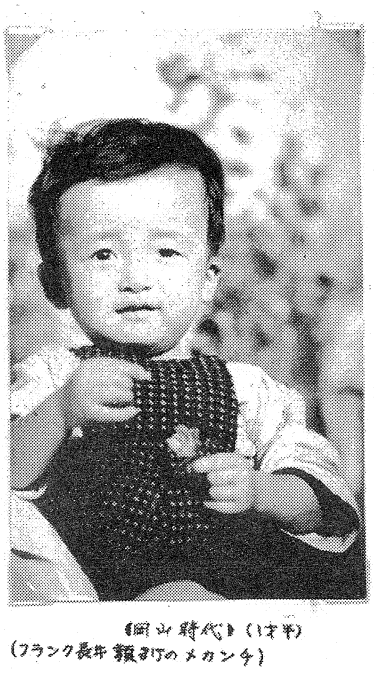


写真1　岡山時代　(1才半)

写真2　幼少期　(前列中央が外山先生)

東北大学から設計事務所へ

1970年東北大学建築学科へ入学。どのような学生生活であったか十分に伺う機会はなかったが、YMCA寮で生活し、大学で宮田学生聖書研究会に所属、信仰告白を行いキリスト者となることから、建築だけでなく聖書とキリスト者の社会的責任について学びを深めた時期だと考えられる。後に結婚する真理さんに出会うのも宮田学生聖書研究会であり、この時の先生は信仰の若い仲間を得て精神的に充実していたのではないか。

一方、卒業論文および卒業設計で高齢者施設の計画に取り組んでおり、当時から既に高齢者施設に対する問題意識を抱いていたようである。

設計事務所からスウェーデンへ

大学を卒業した先生は、1974年病院建築を専門とする東京の田口正生建築設計事務所、次いで㈱RG工房（後の公共施設研究所）に就職。病院建築の設計に7年間携わる。しかし、NHKの番組*1で紹介されていたように、病院建築の打ち合わせには医者、看護婦、建築家は登場するものの、本来の使い手である患者がそこに出てこないことに次第に疑問を抱くようになり、最後の仕事となった丹下健三事務所によるアンマンでの病院計画を最後にスウェーデンへ家族を連れての留学を決意。高齢者の視点に立って建築を考えたいという思いから、「users' point of view」という言葉に惹かれスウェーデン王立工科大学スヴェン・ティーベイ先生のもとを訪ねる。

しかし、スウェーデン語講座の授業は全て英語。まず英語を習得しなければスウェーデン語の授業も分からず、言葉の壁に大変な苦労を重ねたようである。京都大学在任中、留学生をなかな

*1）2002年12月および2003年1月にNHK教育テレビで放映された「心の時間　外山義　もうひとつの家を」

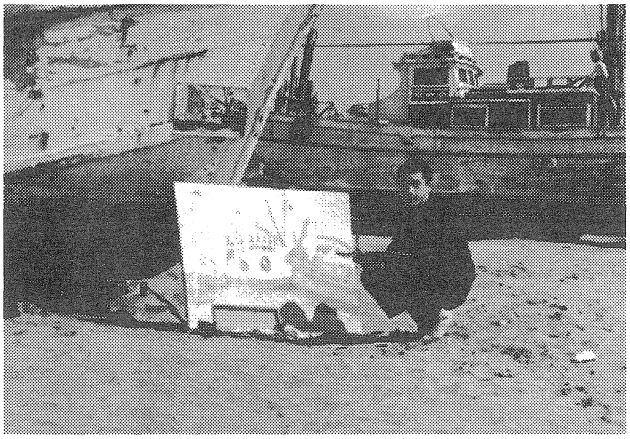


写真3　九十九里浜にて（高校時代）

写真4　高校の卒業旅行（後列左から二人目が外山先生）

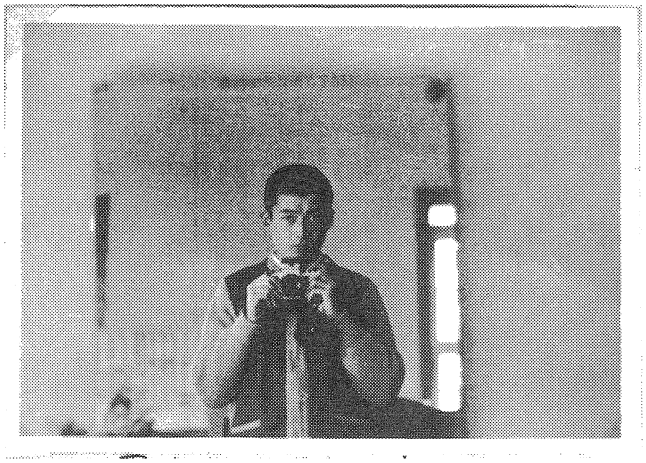


写真5　買ったばかりのｶﾒﾗで鏡に映る自分を撮影する　（高校時代）

か受け入れなかったのはこうした自らの苦労が背景にあったはずである。おそらく先生の人生で最も困難な時期といえるが、こうした状況で1986年に日本の大学の修士号に相当するLicentiato（ライセンシエイト）の資格を取得する。この修士論文は、スウェーデン社会における福祉施設の歴史的変遷を施設と住宅の歩み寄りとして体系付けた内容で、帰国後に取り組む「住まいとしての施設」の出発点となる。この頃には、スウェーデン語も上達し、続く学位論文（1988年）では、加齢により高齢者施設に入所せざるを得なくなった高齢者19名の心と環境の相互浸透的関係を環境心理学的観点から克明に既述し、住環境に求められる質を「Identity and Milue（高齢者の人格と環境）」にまとめる。　この論文の査読は、米国MITのサンドラハウエル女史を迎えて行われ、その研究の着眼点、対象へのアプローチは、米国の環境心理学者クレアクーパーマルカス女史の著書「House as a Mirror of Self」に引用されるなど世界的な評価を受け、わが国においても1990年に日本建築学会奨励賞（論文）を受賞している。

帰国後のしごと

1）特別養護老人ホームの個室化

帰国後は厚生省の国立医療・病院管理研究所建築設備主任研究官に就く。このとき外山先生は39歳。研究者としての出遅れを取り戻すかのように猛烈に仕事に取り掛かる。はじめに手がけたのは特別養護老人ホームの個室化であった。当時のわが国の高齢者福祉は国際的な水準から大きく引き離され特養の一人当り居室面積が8.2m²、原則四人部屋という状況。スウェーデンで高齢者施策を学んだ経験から、全室個室のモデル施設を作る機会をうかがい、富山県宇奈月町にわが国で全国初となる全室個室の特養ホーム「おらはうす宇奈月」を設計監修する（1994年）（図表

写真6　ポートレイト（大学時代）

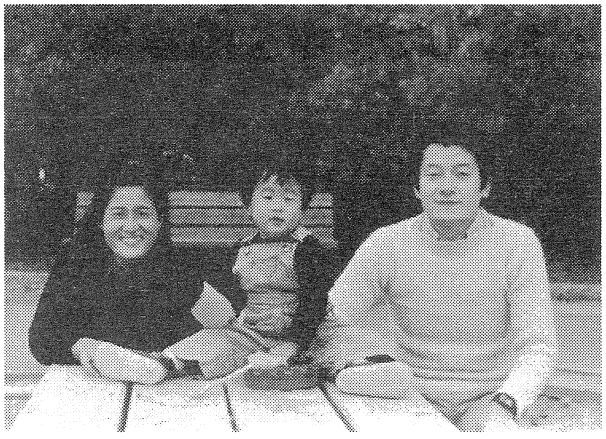


写真7　家族を同伴での留学（スウェーデン時代）

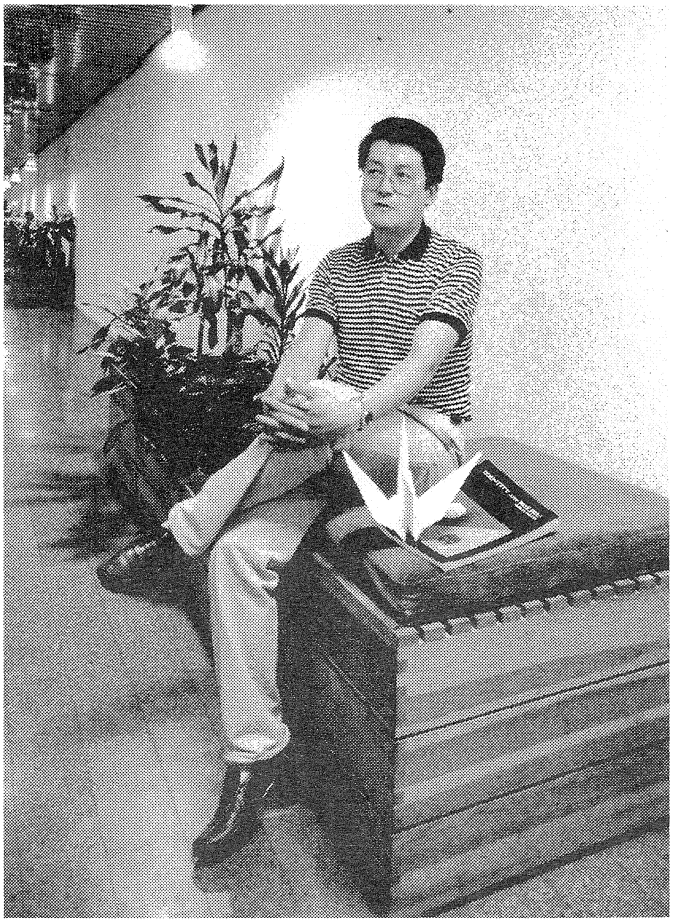
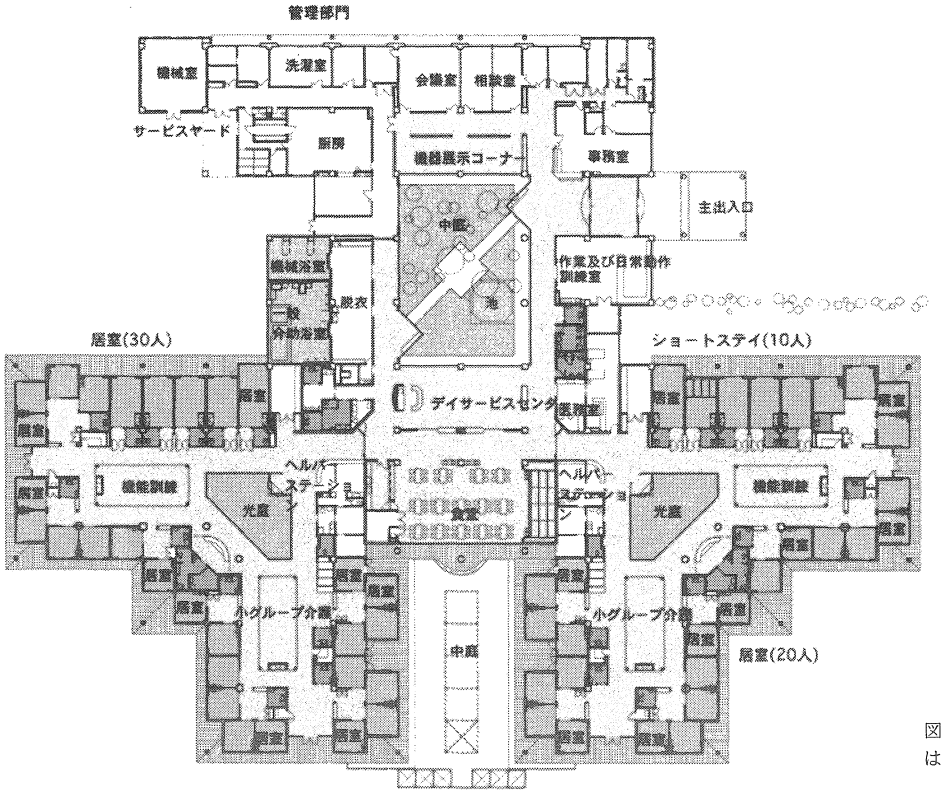


写真8　博士論文を書き上げ、スウェーデンの新聞に研究が掲載されたときの写真（折鶴の下が製本された論文）

2)。この施設は全室個室であるほか、4つの個室が共用の居間を囲み、さらに何段階もの共用空間によって施設全体が構成されるという特徴を持つ。各空間はプライベート、セミプライベート、セミパブリック、パブリックとその性格が位置付けられ(図表2)、非常に明快な段階的な施設空間構成を採用してあり、理念を直接空間化した高齢者施設といえる。生前、外山先生は、自分が設計に関わる施設には必ず空間的な仮説を盛り込み、その検証を行うことで建築計画理論に演繹させる、と自身の建築を語っていたが、おらはうす宇奈月はまさに「個室化」、「プライベートからパブリックに至る段階的空間構成」理論の実験空間であった。そして、外山先生を高齢者福祉のカリスマ的存在にのし上げたのが、このおらはうす宇奈月の検証研究である。当時の東京大学高橋鷹志研究室の博士課程、橘弘志氏(現、実践女子大学助教授)、古賀紀江氏(現、前橋工科大学講師)、横浜国立大学の井上由起子氏(現、国立保健医療科学院施設科学部主任研究官)らと共同して、おらはうす宇奈月における高齢者の生活とケアを数年に渡り追跡調査し、「個室型特別養護老人ホームにおける個室内の個人的領域形成に関する研究」「住まいとしての特別養護老人ホームのあり方に関する研究(その1)—高齢者居住施設における入居者の個人的領域形成に関する考察—」「住まいとしての特別養護老人ホームのあり方に関する研究(その2)—高齢者居住施設における個別的介護に関する考察—」「特別養護老人ホーム入居者の施設空間に展開する生活行動の場　—個室型特別養護老人ホームの空間構成に関する研究　その1—」「特別養護老人ホーム入居者の個人的領域形成と施設空間構成　—個室型特別養護老人ホームの空間構成に関する研究その2—」等の論文にまとめたのである。6本の黄表紙を生み出した点において、おらはうす宇奈月は現在でも黄表紙掲載数の日本記録を持つ建物であろう。



図表1　帰国後の第一作となった特養「おらはうす宇奈月」(1994年竣工)

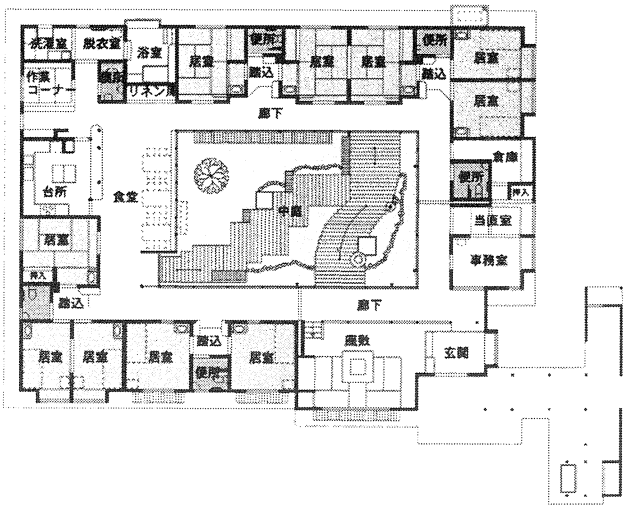
	定義	領域の管理者
プライベートゾーン	入居者個人の所有物を持ち込み管理する領域。一般には居室を指す。	入居者
セミプライベートゾーン	ﾌﾟﾗｲﾍﾞｰﾄｿﾞｰﾝ の外側にあって複数の入居者により利用される領域。居室前の廊下部分なども含まれる。	複数の入居者
セミパブリックゾーン	基本的には食事やリハビリ、レクレーションなどの集団的行為が行われる領域(プログラム間の空白時間には自発的行為も行われる)。	職員(寮母)
パブリックゾーン	入居者と地域住民、外部社会の双方に開かれた領域。	職員　地域住民

図表2 「おらはうす宇奈月」では領域に段階構成を採用。空間は必ずしも意図通りに使われなかったが、その理念はその後の高齢者施設の建築計画に大きな影響を与えた。

2）痴呆性高齢者グループホーム

続く仕事は痴呆性高齢者グループホーム。1980年代の北欧で取り組み始められたグループホームの効果がわが国にも伝え聞かれるようになった1990年代のことである。スウェーデンでPh.Dを取得し、おらはうす宇奈月の実践から高齢者施設計画の研究者としての地位を得ていた先生の下にグループホームの設計監修の話が舞い込んだのは当然の成り行きであった。痴呆専門病院であったきのこエスポアール病院（岡山県笠岡市）および厚生省出身の宮城県知事、浅野史郎氏に請われ、1996年3月痴呆性グループホーム「炉端の家」（岡山県笠岡市）、1996年9月に「こもれびの家」（宮城県名取市）を竣工させる。特に「炉端の家」での失敗をもとに外部との関係性を改善した「こもれびの家」（図表3）は、当時、痴呆性グループホームとは何か、手探りの状況にあったわが国にとって、あるべき形態の方向性とケアのコンセプトを明確に示した点において、わが国の高齢者福祉の歴史に残る建物となった。

おらはうす宇奈月と同様、こもれびの家についても、東京大学長澤研究室の博士課程、石井敏氏（現、東北工業大学講師）、厳爽氏（現、日本学術振興会特別研究員）らと数年間に渡る追跡調査を行い、「痴呆性老人の環境構築に関する研究—グループホームにおける痴呆性老人の空間利用に関する考察—」「グループホームにおける空間利用の時系列的変化に関する考察　—「なじみ」からみた痴呆性高齢者のケア環境に関する研究（その1）—」「先進事例にみる共用空間の構成と生活の関わり　—痴呆性高齢者のためのグループホームに関する研究　その1—」「介護体制と入居者の生活構成の関わりに関する考察　—「なじみ」からみた痴呆性高齢者のケア環境に関する研究（その2）—」等の論文をまとめている。こうした設計アドヴァイザー活動、研究指導、そして「痴呆性老人グループホームのあり方についての調査研究委員会」等国の委員として活動がわが国における痴呆性高齢者グループホームの制度化（運営費については1997年度、施設整備費については2000年度実現）に大きな影響を与えたことは言うまでもない。



図表3　わが国の痴呆性グループホームのモデルとなった「こもれびの家」（1996年竣工・宮城県名取市）

写真9　施設的でないこもれびの家外観

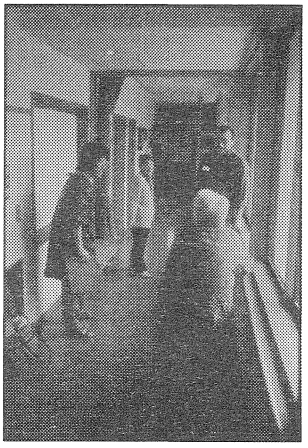


写真10　手すり代わりの窓枠

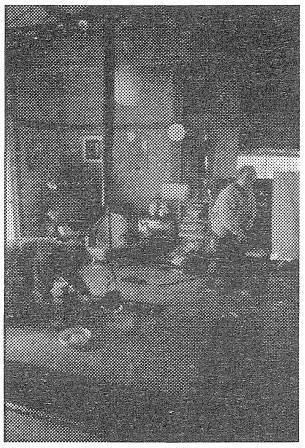


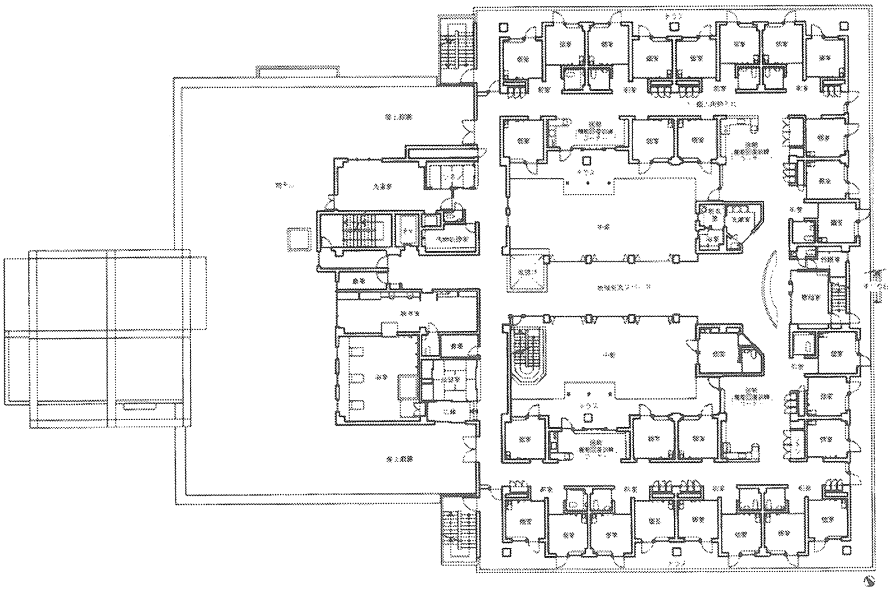
写真11　いろりを掃除する高齢者

3）全個室ユニット化

京都大学に赴任されてからは、小規模で家庭的なグループホームの質を大規模施設に取り入れるべく、大規模施設を複数のユニット（家という単位）により構成させた施設（全室個室ユニット化）の計画に取り組む。老人保健施設「ケアタウン」（秋田県鷹巣町）（写真11,12）、特別養護老人ホーム「風の村」（千葉県八街市）（図表4）などである。特に千葉の生活クラブ生協が運営する「風の村」は、その空間とケアの質においてユニットケアのモデル特養となった。また、京都大学外山研究室で取り組んだ岐阜県古川町の特別養護老人ホーム「飛騨寿楽苑」の3年にわたる追跡調査は、入居者、職員が同一という条件で建物を全室個室ユニット化したため、物理的環境が高齢者の生活展開とケアへ及ぼす有効性を具体的に実証し、厚生労働省による2003年から新型特養の制度化を大きく後押しした。また、2000年には介護保険による痴呆性グループホームの制度化に合せて「グループホーム読本　痴呆性高齢者ケアの切り札」（ミネルヴァ書房）を編著し、1996年から取り組んだグループホームに関する成果を世に示した。

京都大学時代、外山先生は名実ともに高齢者ケアの第一人者。「身体拘束ゼロ作戦」など各種委員会委員を歴任するほか、自称年間400回*2という講演活動、設計監修と全国を飛び回る生活であった。昨日は秋田、翌日高知、その後、韓国を経由して福岡という殺人的なスケジュールを研究室では「全国的徘徊」と称し、体を心配すると同時にそのスタミナに驚いていたが、恐らく先生は移動時間で睡眠を充足させていたのではないか。またそうした多忙極まる生活を自ら歓迎していたし、あまり大学には居たくないように見受けられた。京都の4年半は優秀修士論文・卒業論文を4本出すなど、研究室活動も密度の濃いものであった。

*2）やや先生が誇張した数字ではないか。実際には年間100回程度と思われる



図表4　厚生労働省が新型特養のモデルとした「風の村」（2001年竣工・千葉県八街市）

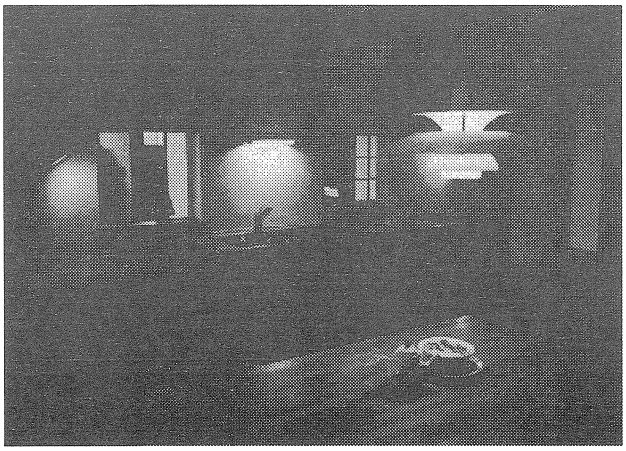


写真12　ケアタウンたかのすリビング（秋田県鷹巣町）

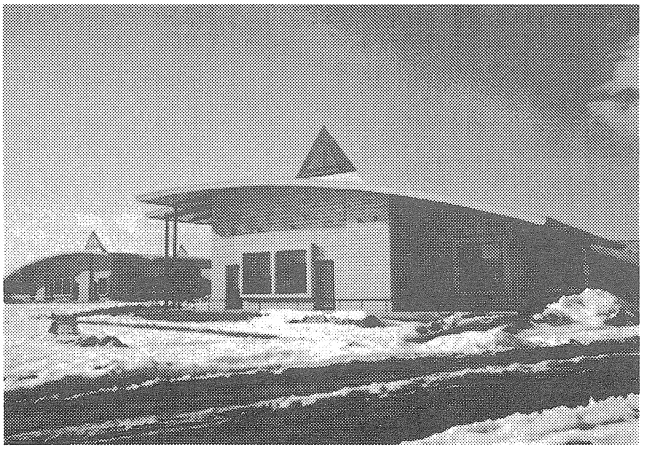


写真12　ケアタウンたかのす外観（秋田県鷹巣町）

最後に

人は自らの死を予期できないが、振り返ると死にゆくために準備していたのではないかと思える不思議な予兆がある。というのも、これだけの講演数に比して、スウェーデン留学時代の研究成果をまとめた「クリッパンの老人たち」(ドメス出版) 以外、思いのほか著書の少ない先生が、亡くなる前年になり帰国後の研究成果を医学書院の雑誌「看護教育」に「生活空間論1～12」として一年間連載したこと (この連載については三浦が図表、写真を入れ、今年度に医学書院から著書として出版される) そして、逝去する一ヶ月前「心の時間　外山義　もうひとつの家を」(NHK教育テレビ) が仙台のご自宅で収録され、大学を卒業した先生がどういう思いでスウェーデンに留学したのか、また帰国して何を目指したのか、その半生が自伝的に語られている。放映直前 (すなわち逝去の数日前)、先生は「NHKの『心の時間』という番組は、人生終わりかけの第四コーナーを回った方が話す番組なんだよね。だからディレクターにまだ僕は結構ですと断ったんだけど、後ろ向きには撮りませんからどうしてもって言われてね (笑)」と嬉しそうに自分の番組について話されたことを思い出す。その言葉を聞き、自伝的な扱いは早すぎはしないか、既に十分評価を受けているのだからこれ以上権威にならなくてもよいのに、と私は心でつぶやいていた。先生が逝去されたのはそれからすぐのことであった。

わが国の高齢者福祉を改革しようと、常に先頭に立ち方向性を示された先生。そのアプローチの最大の特色は、工学が最も苦手とする人間性の問題に正面から向き会おうとする点にあり、その背後には信仰があったと確信する。ともすると人間性なき科学が幅を利かせる中で、あるべき姿を追求された先生の志を受け継ぎ、蒔かれた種を大きく育てることが私たちに託された役割であろう。

外山　義（とやま　ただし）
昭和２５年４月２２日、岡山市生まれ、平成14年11月9日急逝（享年52歳）

□学歴
昭和４９年３月　東北大学工学部（建築学科）
　５７年９月　スウェーデン王立工科大学博士課程（Building Function Analysis）
　６１年７月　スウェーデン王立工科大学博士課程修了（Building Function Analysis）

□職歴
昭和４９年４月　株式会社田口正生建築設計事務所入所
　５１年１月　株式会社RG工房入所（昭和５５年公共設計と改称）
　６１年８月　スウェーデン王立工科大学研究員に採用
平成元年４月　厚生技官　病院管理研究所　建築設備主任研究員に採用
　２年７月　国立医療・病院管理研究所　施設計画研究部地域医療施設計画研究室長に昇任
　８年４月　東北大学大学院工学研究科都市建築学専攻都市デザイン学講座助教授採用
　１０年７月　京都大学大学院工学研究科環境地球工学専攻居住空間工学講座教授採用
　１４年11月　急逝（享年52歳）

（帰国後携わった建築）
１．特別養護老人ホーム「おらはうす宇奈月」
竣工　平成６年６月　富山県下新川郡宇奈月町
全国初の全個室型特別養護老人ホーム。4つの個室が共用の居間を囲み、さらに何段階もの共用空間によって施設全体が構成ささされている。本計画は敷地選定を含む基本計画段階から基本設計、実施設計に至るまで、実際にスケッチを起こし設計図面に繰り返しチェックを入れながら設計監修を行った。1996年度日本医療福祉建築賞を受賞している。
定員50名。ショートステイ10名。延床面積4,740m²。病院建築No.107 pp20-22に掲載

２．痴呆性高齢者グループホーム「炉端の家」
竣工　平成８年３月　岡山県笠岡市
全国初の公設の痴呆性高齢者グループホーム。専用便所付個室８つが炉端を囲む畳の共用空間と中庭をとり囲む空間構成。基本計画段階から基本設計段階まで、実際にスケッチを起こし設計図にチェックを入れながら設計監修を行った。特に居室ユニットは詳細に図面で指示をしている。
定員８名。延床面積303m²。病院建築No.113 pp12-13に掲載

３．痴呆性高齢者グループホーム「こもれびの家」
竣工　平成８年９月　宮城県名取市
「炉端の家」の問題点に改良を加えた空間構成。日常生活の手つづき性を空間化したいくつかのディテールを試みている。本計画は、敷地選考を含む基本計画段階から基本、実施設計に至るまで、実際にスケッチを起こし設計図面に繰り返しチェックを入れながら設計監修を行った。
定員９名。延床面積392m²。病院建築No.117 pp23-25、建築画報Vol.36、pp54-57に掲載

４．特別養護老人ホーム「ウェルポート鹿嶋の郷」
竣工　平成10年３月　茨城県鹿嶋市
全室個室、総平屋の特別養護老人ホーム。全体を８～12人の生活単位6つによって構成し、各単位ごとにグループホームとして展開が可能なように計画した。
定員50名。ショートステイ10名。延床面積3,596m²。建築画報Vol.36 pp26-29に掲載

５．Ｔ氏邸（自邸）
竣工　平成６年　宮城県仙台市
三世代隣居の子ども世帯側の新築計画。親世帯側の改築計画を連動させながら、子ども世帯の老後のライフサイクルまで視野に入れたバリアフリー住宅として設計した。身体機能低下に対応するディテールや空間的配慮を特殊化せずにユニバーサルデザインとして解決している。
延床面積200m²。

６．老人保健施設「ケアタウン」
竣工　平成11年12月　秋田県鷹巣町
全室専用トイレ付個室、総平屋の老人保健施設。８床毎のグループホームによって全体が構成されている。“終の住処としての施設”ではなく、在宅居住支援のための拠点施設として計画した。

定員110名。延床面積8,593m²。病院建築No.128 pp6-11、日経アーキテクチャーNo.641pp39-43、平成１２年度医療福祉建築賞受賞

７．痴呆性高齢者グループホーム「いわうちわの里」
竣工　平成12年３月　富山県宇奈月町
12.「こもれびの家」における調査研究の成果を生かし、新たな空間構成を試みている。
定員８名。計画面積370m²。建築画報Vol.36 pp50-53に掲載

８．特別養護老人ホーム「風の村」
竣工　平成12年３月　千葉県八街市
全室個室。生活クラブ生協の活動の一環として計画。“生命力がしぼまない施設を目指して”がキーワード。
定員50名。ショートステイ７名。計画面積3,640m²。
病院建築No.130 pp22-25に掲載、平成１２年度千葉県建築文化賞受賞

９．デイケアセンター併設型痴呆性高齢者グループホーム「楓＆メイプルリーフ」
竣工　平成12年３月　奈良県奈良市
ニュータウンに計画されたこのグループホームではサブカルチャーとしての住様式への対応がテーマであり、和式と洋式のツインユニットで構成されている。
定員18名。計画面積1,573.6m²。平成12年度医療福祉建築賞受賞
日経アーキテクチャーNo.667,pp38-42に掲載

10．痴呆性高齢者グループホーム「フレール魚崎」
竣工　平成12年３月　兵庫県神戸市
我が国初の公営住宅の中に実現したグループホーム。各居室を一般住戸として計画。
定員16名。計画面積2,916.7m²。
日経アーキテクチャーNo.667,p58に掲載

11．痴呆性高齢者グループホーム「フレール西須磨」
竣工　平成12年３月　兵庫県神戸市
フレール魚崎と同様、我が国初の公営住宅の中に実現したグループホーム。
定員12名。計画面積2,145.1m²。
日経アーキテクチャーNo.667,p58に掲載

12．特別養護老人ホームけま喜楽苑＋グループホームいなの家
竣工　平成13年３月　兵庫県尼崎市
特別養護老人ホームのフロアは、10人から15人のグループを基本単位として計画され、それぞれのユニットが完全に分断されるのではなく、ゆるやかに連続する調整型ユニットを取り入れた点、変形の敷地という悪条件を逆手に取り多様な共用空間を作り出した点、限られた面積の中で全室個室を実現したうえでトイレをほぼ全室に設けた点を特徴とする。平成13年度医療福祉建築賞受賞。設計監修として基本計画からディテールまで参画した。
定員特別養護老人ホーム50名、ショートステイ20名、痴呆性グループホーム18名＋デイサービスセンター。敷地面積3218,47m²、建築面積1919,37m²、延床面積4774.93m²。2002年度医療福祉建築賞受賞。

13. グループホームぼだいじ　2001.3竣工

14. 阿仁養護老人ホーム　2002.11竣工

15. 有吉病院　2002.11竣工

16. 特別養護老人ホーム西伯有楽園　2002.4竣工

17. 熊本県こども総合療育センター　実施設計中

18. 山形県鶴岡市特別養護老人ホーム（仮）　実施設計中

19. 山形県白鷹町特別養護老人ホーム（仮）　実施設計中